

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：17301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K19964

研究課題名（和文）第三共和政期フランスの道德教育論争に基づくベルクソンとデュルケームの倫理思想研究

研究課題名（英文）A Study of Ethical Thoughts of Bergson and Durkheim Based on the Moral Education Controversy in the French Third Republic

研究代表者

田村 康貴（Tamura, Koki）

長崎大学・多文化社会学部・助教

研究者番号：40952651

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、倫理学史と道德教育史の両面で成果をあげることができた。倫理学史に関する成果としては、第一に、ベルクソンとデュルケームに関する先行研究の妥当性を批判的に検証し、新たな解釈を提示することができた。第二に、第三共和政期に登場した複数の倫理学説とベルクソンの倫理思想との関連を考察することにより、『道德と宗教の二源泉』以前のベルクソン哲学が有する倫理的含意を明らかにすることができた。道德教育史に関する成果としては、第三共和政の道德教育の鍵概念である「道德的直観」に着目し、フランス・スピリチュアリズムからの理論的影響や、フェルディナン・ビュイッソンによる解釈変更の実態を解明することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ベルクソン研究としては、先行研究があまり注目してこなかったベルクソンの道德教育論を軸に、彼の思想の倫理的含意を解明した点に意義があると言える。また、デュルケーム研究としては、社会学や教育学ではなく倫理学の観点から、彼の思想の哲学的ルーツや同時代の自然科学からの影響を明らかにした点に意義がある。

さらに本研究では、いかにして人に道德を教えるべきか、という道德教育の方法をめぐる問いに対して、倫理学がなす実践的貢献の射程を考察した。第三共和政期フランスにおける倫理思想と道德教育の相関関係を批判的に検討した本研究は、現代倫理学の知見を踏まえた新たな道德教育論構築の端緒にもなりうると思われる。

研究成果の概要（英文）：We have made achievements both in the history of ethics and in the history of moral education in France.

There are two results concerning the history of ethics. First, we critically examined the validity of previous studies on the differences and similarities between Bergson and Durkheim, and attempted a new interpretation. Second, we investigated the relation between several ethical theories that appeared during the Third Republic and Bergson's ethical thought, and clarified the ethical implications of Bergson's philosophy before *The Two Sources of Morality and Religion*.

On the other hand, as the results related to the history of moral education, we focused on "moral intuition", a key concept in moral education in the Third Republic, and elucidated the theoretical influences from French Spiritualism and the aim of Ferdinand Buisson's reinterpretation of the concept.

研究分野：倫理学

キーワード：ベルクソン デュルケーム 倫理学 道德教育 フランス第三共和政

1. 研究開始当初の背景

いかにして人に道徳を教えるべきか、という道徳教育の方法をめぐる問いは、古代ギリシアにおける哲学・倫理学の理論的展開と密接に関連する重要な問いであった。だが近世以降、カント、ベンサム、ミルといったイギリスやドイツの哲学者・倫理学者を中心とする規範倫理学の台頭や、メタ倫理的な問いと方法の確立により、倫理学の理論の精緻化は進んだものの、その成果を道徳教育にどう活かすかという議論はあまりされてこなかった。また、応用倫理学にしても、生命・環境・情報等のトピックと比べると、教育には関心を向けてこなかったように思う。その結果、現在では、道徳理論は倫理学の領分、道徳教育は教育学の領分、という不毛な住み分けが定着している。倫理学と教育を架橋する必要性は認識されており、P4C (philosophy for children) や哲学カフェ等の試みが行なわれているにもかかわらず、倫理学の理論を道徳教育に応用するための方法は十分に検討されていなかった。

しかもこの問題は、倫理学史研究におけるフランス倫理学の過小評価とも無縁ではない。というのも、近現代においていわば主流派をなした英語圏・独語圏の倫理学と対峙しながら、それとは別様の進展を遂げてきたフランス倫理学の特色は、道徳教育のカリキュラム策定や教員養成への積極的関与、そして現場の教師から寄せられる要請への応答にこそ見出されるからである。だが、このような道徳教育との相互的な影響関係を踏まえたフランス倫理学の研究は、本研究が開始された当初はほぼ存在しておらず、このことは倫理学史のみならず、道徳教育史研究や道徳教育の実践にとっても大きな損失であると思われる。

以上の問題意識から、本研究は、ベルクソンとデュルケームの倫理思想に注目した。というのも、第三共和政期(1870年～1940年)のフランスでは、政府主導で公教育の脱宗教化が進められた際、ベルクソンとデュルケームを両極とする当時のフランスの哲学者と社会学者が、来たるべき道徳教育のあり方をめぐり論争を繰り広げていたからである。半世紀以上にわたったこの論争を通して道徳教育の理念や覇権がどう変遷したか、教育実践への応用を重視するベルクソンとデュルケームの倫理思想がどのような現代的ポテンシャルを秘めているかは、本研究の開始時点ではまだ明らかになっていなかったため、研究する意義が大きいと思われた。

2. 研究の目的

上述のとおり、従来の倫理学史研究では、実践への応用を重視する近現代フランス倫理学の意義や、倫理学の理論を道徳教育に応用するための方法は、十分に検討されてこなかった。こうした状況を打破するには、特定の倫理学者の著作を専一に読解するだけでなく、教育思想史や社会思想史を踏まえた包括的な研究が必要となる。そこで本研究では、第三共和政期フランスで繰り広げられた道徳教育論争の実態解明に基づいて、論争の中心人物であったベルクソンとデュルケームの倫理思想がもつ現代的意義を明確に示すことを目的とする。

また、以上の考察を遂行するにあたり、第三共和政期のフランスにおいて生じた倫理学の理論的展開と、フランス国内における道徳教育の指導内容の変化との相関関係にも着目する。当時のフランスにおける道徳・公民科のカリキュラムや、その教科書・副読本には、規範や価値に関する同時代の思潮が反映されており、そこには倫理学の理論を道徳教育に応用するための方法をめぐる真摯な議論の成果や教訓が見て取れるからである。したがって、ベルクソンとデュルケームの倫理思想を検討するだけでなく、第三共和政期フランスの倫理学による実践例を踏まえながら、倫理学の理論を道徳教育に応用するための有効な方法を提案することも本研究の目的となる。

3. 研究の方法

本研究は、大きく分けて二つの段階を経て遂行される。

第一に、第三共和政期フランスの道徳教育論争に関する資料を収集し、道徳教育論争の顛末を倫理学史と教育学史の両面から調査する。倫理学史については、当時の代表的著作(ルヌヴィエ、フイエ、ギュイヨー、レヴィ＝ブリュル、パイエ等)や、主要学術誌(『哲学雑誌』『形而上学・道徳学雑誌』等)を手がかりに関連資料を収集する。一方、教育学史については、道徳教育のカリキュラム策定に関与した人物(ジャン、ピュイソン、ラビー等)の著作のほか、教科書や副読本を収集し、内容ごとに分類・整理する。なお、日本国内で入手困難な資料は、パリのフランス国立図書館やジャック・ドゥーゼ文学書館を利用して収集を進める。このようにして集めた資料を精査することにより、第三共和政期フランスの道徳教育論争には、哲学と社会学の対決だけでなく、教会権力や英独倫理学への対抗を目的とする両者の共闘も見出されることを示す。

第二に、道徳教育論争に関する以上の調査結果を踏まえて、件の論争の文脈にベルクソンとデュルケームの倫理思想を置き直し、それらを包括的に理解することにより、彼らの倫理思想の現代的意義を解明する。ベルクソンについては、近年再評価が進む卓越主義に独自の生命論や宗教論を接合している点で、デュルケームについては、近代的人間観を超越するべ

く古代ギリシア哲学や同時代の発生学の知見を総合した独自の倫理思想を構想している点で、両者がいまなお倫理的に重要であることを示す。さらに、彼らの倫理思想が当時の道徳教育にどのように反映されたかについての分析をおこなう。

4. 研究成果

本研究の成果は、大きく分けて四つある。

第一に、19世紀後半から20世紀前半にかけてのフランスで生じた道徳教育論争の顛末を、同時代の哲学・社会学・教育学の著作や資料の読解を通じて明らかにすることを試みた。特に、フランス第三共和政の道徳教育に理論的にも政治的にも影響を及ぼしたフェルディナン・ビュイッソンの諸著作において、鍵概念となる「道徳的直観」の定義がどのように変化していったかについて考察した。さらに、フランス・スピリチュアリズム（特にクザン）の直観論がビュイッソンの理論に与えた影響や、デュルケームの道徳教育論とビュイッソンのそれとの対応関係についての解釈をおこなった。いずれの考察も、いまだに不明な点の多い第三共和政期フランスにおける道徳教育論争の実態解明に寄与する重要なものである。

第二に、デュルケーム社会学からベルクソンの『道徳と宗教の二源泉』への理論的影響や、両者の相違点や対立点について論じた先行研究における主張の妥当性を検証した。まず、ベルクソンとデュルケームを比較した著作を網羅的に読解し、複数の解釈者が「生物学」に関する両者の差異と、「習慣」に関する両者の類似を説いていることを確認した。次に、ベルクソンとデュルケームのテキストを精読することによって、両者が「生物学」と「習慣」についてどのようなことを主張し、どのような論証を展開しているかを整理した。この考察を踏まえて、あらためて先行研究を批判的に検討することにより、複数の解釈者が主張するようなベルクソンとデュルケームとの差異や類似は、どちらもテキスト上の根拠を欠いていることを明らかにした。

第三に、19世紀後半から20世紀前半にかけてのフランスに登場したいくつかの倫理学説を分類・整理し、それらに対するベルクソン哲学からの影響を検証した。その結果を踏まえて、ここでは、ベルクソン哲学への言及がとくに顕著に見て取れたフレデリック・ロオの『道徳的経験』を考察の中心に据えた。同書においてロオが参照しているのは、ベルクソンが道徳についての思索を本格的に展開した『道徳と宗教の二源泉』以前のベルクソン哲学である。この点に着目しながら考察を進めたことにより、『二源泉』以前のベルクソン哲学が有する倫理的含意を明らかにし、さらに、ロオをはじめとする当時の倫理学説に対するある種の応答として『二源泉』を読解する可能性を示すことができた。

第四に、デュルケーム社会学において、時期を問わず一貫して鍵概念であり続けた「集合的表象」の起源を思想史と科学史の両面から探った。まず思想史の面では、“集合的・一般的なものとは部分的・特殊なものとの総和以上の何かである。”という規定は、デュルケーム自身がたびたび言及するルソーにも見られるものであるが、思想史においてはそこからさらに遡ること（モンテスキュー、マルブランシュ、アウグスティヌス、等々）も可能であることが明らかになった。一方、科学史の面では、デュルケームが「集合的表象」をめぐる持論を展開する際、その論拠にしていると思われる同時代の生物学（とりわけ発生学）におけるいくつかの知見を特定することができた。

以上の研究成果はいずれも、19世紀後半から20世紀前半にかけてのフランス倫理学史研究を着実に前進させるものであると思われる。同時にこれらの成果により、ベルクソンやデュルケームといった特定個人の思想の枠組みにとどまらない、より広範な対象の分析が必要であるということを示すことができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 田村 康貴	4. 巻 28
2. 論文標題 ビューッソンの道徳教育論における直観の問題とデュルケーム	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 フランス哲学・思想研究	6. 最初と最後の頁 213～222
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.51086/sfjp.28.0_213	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 田村 康貴
2. 発表標題 倫理学からのコメント
3. 学会等名 公開研究会「現代社会における宗教の位置」第2部 世俗化問題の多面性：『世俗化論の生成』合評会（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------